

SWOT 分析におけるスキー場の現状と課題

～岐阜県平湯温泉スキーを事例として～

生涯スポーツゼミナール 1213163 水野 はるな

1. 研究動機・研究目的

スキーは 1911 年に日本に初めて導入された。レジャー白書によると、最盛期であった 1993 年にはスキー人口が 1860 万人にまで増加した。それに伴い、既存のスキー場の拡張、新規のスキー場の営業開始、1987 年の総合保護地域整備法(通称:リゾート法)によるスキー場の開発などスキー場も増加した。しかし、1993 年以降、スキー人口が急激に減少した。スキー人口の減少に伴い、最盛期、日本には 763 か所のスキー場があったが、2012 年までに 284 のスキー場が閉鎖・休業し、そのなかでも東海地方、特に岐阜県のスキー場が最も多かった(呉羽, 2014)。閉鎖・休業するスキー場の特徴として、呉羽(2014)は、標高差が小さく(200m 以下)、設置されている索道数が 1~2 基と小規模なスキー場であること、索道の経営資本が大都市近隣地域では都市資本、その他の地域では市町村(地元資本)であるスキー場(小規模)が多い傾向にあると述べている。しかし、岐阜県高山市にある平湯温泉スキー場は 1951 年以前からあるスキー場であり、コース数も索道数も少なく、知名度も低い小規模のスキー場であり、呉羽(2014)が述べる閉鎖するスキー場の条件に一致しているが現在も存続している。

そこで、本研究は閉鎖するスキー場の条件に該当する平湯温泉スキー場が現在もなお存続する理由について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究は上記の目的を明らかにするために、以下の調査を行った。

調査対象地は岐阜県奥飛騨温泉郷平湯、調査実施期間は 2016 年 9 月 13 日から 2016 年 9 月 20 日までの 8 日間で行った。

第一に平湯温泉スキー場を経営する株式会社ひらゆの森とスキー学校関係者、平湯の旅館 16 軒の経営者・関係者、その他平湯に関わりのある人、計 84 名を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの内容はスキー場に関することを 12 問と平湯(地域)に関すること 4 問を調査した。アンケートは良くあてはまるものを 1 つだけ選択し、その他当てはまるものを複数選択するようにした。

第二に「ひらゆの森」のスキー場のセンター長と平湯温泉スキー学校の校長の 2 名にインタビュー調査を行った。スキーセンター長には株式会社ひらゆの森の歴史、経営方針、スキー場での戦略、今後の試みを、スキー学校の校長にはスキー場の歴史について尋ねた。

第三にアンケート調査とインタビュー調査より、スキー場の現状と課題を明らかにし、SWOT 分析を行った。その後クロス SWOT 分析を行い、今後の平湯温泉スキー場の発展の為の提言を行った。

3. 主な結果と考察

平湯温泉スキー場が存続する理由は第一にスキー場と地域の連携、第二にスキー場の利用客の存在であった。平湯(地域)には「温泉」「名産品」「他の観光地へのアクセスがよい」などと言った地域の特徴や魅力がたくさんある。そのような特徴や魅力を活かしていること、例えば、平湯にある温泉旅館とスキー場が連携し、リフト券の割引をすることや旅館の関係者がスキー学校の指導者やスキー場のパトロールに協力するなど、地元の人と協力し、地域に支えられたスキー場であると考えられる。スキー場は平湯と言う地域が存在しているから成り立っている。また、同時に、平湯住民が立ち上げたスキー場であり、子どもの時から関わりがあるスキー場であることから、平湯温泉スキー場は地元の人たちの交流の場であり、地域活性化のために必要なものだと思っている。このように地域と連携しあうスキー場であることが現在も存続する理由だと考えられる。第二にスキー場の利用客の存在である。平湯のスキー場を気に入って毎年スキー場に来てくれる利用客がたくさんいること、また、スキー場も極力イベントや大会の開催を行わず、個人の利用客が思う存分スキーが楽しめる環境を作っている。このようにスキー場の利用客やリピーターの存在、そしてその利用客を第一に考えるスキー場の経営方針が現在も存続する第二の理由と考えられる。

スキー場の課題はスキー場のスタッフの高齢化と人材不足であることであった。現在、スキー場のスタッフの平均年齢が50代である。そのため、学生や20代の若者をスキー場に呼ぶことが必要であり、修学旅行やスキー研修などの学校行事の誘致をすることや、学生向けのスキー旅行プランを旅行会社等と連携して行うことが考えられる。そしてたくさんの若者にスキー場に来てもらい、スキー場や平湯の魅力を知ってもらうことが必要ではないかと考える。

4. 結論

平湯温泉スキー場が現在も存続する理由は、第一にスキー場と地域の人との連携、第二にスキー場の利用客の存在であった。スキー場の課題はスキー場のスタッフの高齢化と人材不足であることが分かった。今後も平湯温泉スキー場が発展していくためには、更なるスキー場と地域の人との連携と利用客を大切にする気持ちや取り組みの継続が必要である。また、多くの人に平湯温泉スキー場を訪れてもらえるように、スキー場を含む平湯の魅力、知名度を上げるイベント、また、若者に多く来てもらえるような企画や取り組みを考えることが必要である。

5. 卒業論文の執筆を終えて

私自身が平湯温泉スキー場の魅力やこれまで築いてきた過程を知ることができ、改めて平湯という場所が好きになりました。調査を通して、平湯の皆様の人柄の良さと地元を愛し、スキー場を守っていこうという温かい気持ちが伝わってきました。そして、改めて平湯はとても良いところだと思いました。そして卒業論文の執筆するにあたり、調査にご協力いただいた平湯の方々、ご指導をして頂いた黒須充教授を始めとする生涯スポーツゼミナールの先輩、同期の皆様に感謝いたします。

最後に、協力していただいた全ての皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。